

琉球大学学術リポジトリ

日本人移民をテーマにした大学の講義 —琉球大学
における実践—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大石, 太郎, Taro, Oishi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010156

日本人移民をテーマにした大学の講義—琉球大学における実践—

大石太郎

- I. はじめに
- II. 受講学生の構成とシラバスおよび成績評価
- III. ドキュメンタリー視聴と学生の反応
- IV. 自己評価—むすびにかえて—

I. はじめに

筆者は、勤務先の琉球大学において 2006 年度から「移民論」という科目を担当している。「移民論」は全学共通教育科目の「琉大特色科目」という位置づけであり、移民県として知られる沖縄の特色を反映した科目である。移民研究に取り組む研究者が自らの講義のなかで移民を取り上げることは当然考えられるし¹⁾、たとえば筆者が専攻する地理学の場合なら、文化地理学や社会地理学、アメリカ地誌といった専門科目のなかで移民についてふれることができる。しかし、共通教育科目として専攻を問わず全学の学生を対象とし、かつ移民にテーマをしばった講義は全国でも珍しいと思われる。そこで、本稿では琉球大学における共通教育科目「移民論」の授業実践を紹介し、読者諸氏のご批判を仰ぎたいというのが、この報告の意図するところである²⁾。

II. 受講学生の構成とシラバスおよび成績評価

まず、受講学生³⁾の構成について述べておきたい。2006 年度前期の受講学生は 76 名であり、性別の内訳は男子学生が 31 名、女子学生が 45 名であった。期末試験当日に実施した質問紙調査によると、沖縄県内の中学校と高校を卒業した学生が 55 名(以下、県内出身学生)、沖縄県外の中学校と高校を卒業した学生が 18 名(以下、県外出身学生)、沖縄県内の中学校を卒業し、沖縄県外の高校を卒業した学生が 1 名であり、県内出身学生が多数を占めていた。しかし、同じ質問紙調査(選択式)によれば、県内出身学生の 40%にあたる 22 名がこれまでの学校教育で移民について「学校では聞いた記憶がない」と回答している。同じ回答をした県外出身学生は 3 名(16.7%)のみであり、全体では 35.1%にあたる 25 名がそう回答した。つまり、沖縄が移民県であるからといって、学校教育の場で他県よりも詳しく勉強しているというわけではないことが分かる⁴⁾。

受講学生の所属学部の内訳をみてみよう。法文学部の学生が 51 名とほぼ 3 分の 2 を占め、教育学部の学生が 4 名、理系学部の学生が 21 名であった⁵⁾。法文学部の学生についてさらに学科別にみると、法学、政策科学・国際関係論、経済学、経営学の各専攻課程が含

まれる総合社会システム学科が31名ともっとも多く、語学、文学、史学を専攻する学生が多い国際言語文化学科がそれに続いた。筆者の属する地理・人類学専攻課程が含まれる人間科学科は7名のみであった。人間科学科には地理・人類学専攻課程のほか、哲学・倫理や心理学などの人間行動専攻課程、社会学やマスコミ学、社会福祉学の社会学専攻課程が含まれている。移民研究では社会学や文化人類学、人文地理学の研究者が大いに貢献しているにもかかわらず、それらの学問分野を専攻する人間科学科の受講学生が少ないのは、もともと他学科よりも学生定員が少ないことに加えて⁶⁾、従来から専攻別に入試を実施してきた法文学部の他学科と異なり、人間科学科では2006年度入学生まで学科全体で学生を募集し、2年次で専攻に振り分けるというシステムをとってきたことも要因かもしれない。人間科学科に入学してくる学生には心理学志望者が多い傾向にあり、それが受講学生数の違いに反映されている可能性がある。

次に、シラバスについて述べる。表1にシラバスの案を示した。これはあくまでも現時点での理想であり、実際にこの通りに実施できたわけではない。この科目は琉大特色科目ということになっているが、沖縄に限定することなく、日本人移民の全体像を理解できるように構成した。そして、これまでの移民研究における主要な研究成果に基づいて、日本人移民に関する概説を行った。ただし、専門分野ないし所属学科・専攻を問わず、卒業論文で移民をテーマにする学生が出現することを想定して、試験に向けたまとめとして移民研究に関する基礎的な概念についての解説も実施し、実質的な最終回とした。また、筆者自身が日本、カナダ、フィリピン、ニューカレドニアで撮影した写真を適宜利用し、とき

表1 共通教育科目「移民論」のシラバス案

回	内 容
1	イントロダクション
2	日本からの出移民—移民の多い県・少ない県—
3	日本からの出移民—なぜ移民したのか—
4	ハワイの日本人移民社会
5	北米の日本人移民社会—適応戦略とホスト社会—
6	北米の日本人移民社会—移民と国際関係—
7	北米の日本人移民社会—強制収容と補償運動—
8	北米の日本人移民社会—三尾村とスティーブストン—
9	北米の移民社会—カナダ建国記念日と移民統合—
10	南米の日本人移民史
11	ビデオ視聴 (ボリビアの沖縄県出身移民一世に関するドキュメンタリー)
12	旧南洋群島の日本人・沖縄人移民
13	移民研究で頻出する用語や概念—まとめ—
14	予備日 (さまざまな移民社会)
15	試験・レポート提出

には写真を中心に講義を組み立てた。それには全体の構成からみると時間調整と息抜きを兼ねたような性格をもたせている。たとえば、第9回の「北米の移民社会—カナダ建国記念日と移民統合—」では、日本人移民からはなれて、カナダ建国記念日(カナダ・デー、7月1日)に首都オタワでの記念イベントに集う人々の写真を中心に、カナダにおける移民統合について簡単に解説した。予備日としている第14回では、「さまざまな移民社会」として2006年度は華人社会を取り上げ、横浜、モントリオール、トロントの中華街(チャイナタウン)の写真を利用しながら解説した。

2006年度の講義では、次のように評価をした。まず、移民研究で頻出する概念や大まかな移民史についての知識を試験によって確認した。そして、選択式のレポートを課した。まず、身近な親戚に移民経験者が存在する場合には、本人ないし家族(両親や祖父母など)に聞き取り調査を行い、移民経験者の個人史をまとめたものをレポートとして提出する選択肢を提示した。この選択肢を選びたくない学生、あるいは身近な親戚に移民経験者が存在しない学生には読書レポートを課し、興味深い聞き取り調査の内容を含み、かつ比較的安価に入手できる飯野(2000)を推薦図書とした。2006年度前期の受講学生の場合、7名が前者を選択し、聞き取り調査を実施してレポートをまとめた。後者の場合、推薦図書を選択した学生はごく少数にとどまり、学生が取り上げた書籍はバラエティに富んでいた⁷⁾。

ところで、この課題設定はカナダ・ケベック州のラヴァル大学地理学教室の実践(Louder and Waddell 1992)を参考にしている。ケベック州はかつて、高い人口圧などのため相当の出移民がみられた地域であり、その多くはニューイングランドの繊維工業都市へ向かった。また、オンタリオ州以西の州にもケベック州からの移住による文化島が存在するし、歴史の異なる大西洋沿岸諸州にもフランス語系コミュニティが存在する。しかし、ケベック州ではまったく関心を寄せられていなかった。そこでラヴァル大学では、北アメリカにおけるフランス文化の痕跡を学生に調べさせ、必修の巡検⁸⁾を実施したという。今回の講義では巡検こそ難しいものの、このラヴァル大学のひそみにならない、過去に出身地(本国)とは異なる環境に生きた人々のことをできるだけ生々しい形で調べさせ、それを通じて学生が何かを感じてくれることを筆者は期待した。

Ⅲ. ドキュメンタリー視聴と学生の反応

1. 概要

2006年度の講義では、移民に関するドキュメンタリーを視聴する回を設け、学生に感想を書かせた。このビデオ視聴は筆者の期待以上の成果があったので、とくに章を分けて紹介する。

視聴したドキュメンタリーは、琉球大学移民研究センター所蔵の「BS 列島スペシャル 家族の絆を守りたい～沖縄・ボリビア移住者は今～」(1996年2月24日放映、60分)で

あり⁹⁾、戦後すぐに沖縄からボリビアに移住した安里さん夫婦の一時帰国の模様を描いたものである。安里さん夫婦（当時70歳代）には四男二女があり、全員がボリビアにおける沖縄県出身移民の移住地コロニア・オキナワで生まれている。安里さん夫婦は成功した移民といえる存在であり、現在では農業のほか、商店も経営している。しかし、後継者として期待している次男（当時40歳）は家族とともに日本に出稼ぎに行き、子どもの教育のために妻子をボリビアに帰国させた後も、自身は横浜で出稼ぎを続けている。また、末っ子である次女（当時32歳）が東京で研修中という状況であった。

安里さん夫婦の一時帰国の目的のひとつは、ボリビアに帰国するよう次男を説得することである。しかし次男は、帰国したいと思っているものの、自分を雇い、責任ある地位を任せてくれている会社に対して責任を果たしたいという気持ちが強く、説得は難航する。次男は取材陣に、国籍はボリビアかもしれないが、日本人としての気概を大切にしたいと述べる。

安里さん夫婦は次に、次女を郷里の沖縄に連れて行く。安里さん夫婦はそれまでに次女以外の子ども全員を沖縄に連れて行ったようである。まず夫の故郷である沖縄島北部の国頭村に向かい、生き残っている唯一の親戚である夫の叔母を訪ね、さらに妻の実家で親戚の歓待を受ける。ボリビア生まれで周囲に親戚のいない状況で育った次女は、話に聞いていただけであった親戚との初めての対面に感激して涙ぐむ。そして、最後に糸満市にある平和祈念公園で、取材陣に「何か両親に聞きたいことは？」と促された次女は、移民したことを後悔していないかどうかを尋ね、後悔していない、ボリビアが自分の国だと思うという回答を得る。

そして、安里さん夫婦は横浜に戻り、次男の説得を再開する¹⁰⁾。結局、次男が半年後に帰国することを約束し、安里さん夫婦はボリビアに帰国する。以上が、視聴したドキュメンタリーの概要である。

2. 学生の反応

このドキュメンタリーに対する学生の感想は、視聴終了後の30分足らずの間に書かせたもので、字数は400字前後に過ぎないが、筆者にとって非常に興味深いものであり、今後の講義の参考にしうるものであった。

学生のコメントは次の3点に集中した。それは、「日本人であろうとする」次男のアイデンティティ、沖縄で親戚に初めて会ったときの次女の気持ち、そして、ボリビアへの移住を後悔していない、ボリビアを故郷だと言い切った安里さん夫婦の気持ちである。

第1点については、そもそも日本人移民の子弟が日本に出稼ぎにきていることを知らなかったという感想も多く、また両親が一世とはいえボリビア生まれの二世が日本語を流暢に話すことへの驚きもあったようだが、日本で生まれ育った日本人よりも日本人らしいと

いう感想が多かった。第3点の、一世である安里さん夫婦がボリビアを故郷だという気持ちと好対照に感じられたとの指摘もみられた。

第2点については、本土出身で沖縄に来てから間もない筆者が事前にビデオを見た際にはあまり気にとめなかったが、県内出身学生にとっては非常に印象的だったようである。私見に過ぎないが、沖縄では親戚の結びつきが本土よりも強いこともその一因だと考えている。そう考える根拠の一例を示そう。沖縄の地元紙である琉球新報と沖縄タイムスには告別式の広告のページがあり、一般の人が掲載し、そして地元の人には朝刊を手にするると最初にそのページを開くといわれる。広告には、濃淡はあるものの、喪主以下家族・親族一同の名前がずらっと並び、場合によっては友人代表や居住する集落の町内会役員の名前まで掲載されている。また、1980年代半ばに生まれた今の学生たちも、3人程度の兄弟がいるのは珍しくない。このように本土に比べると一般的に親戚づきあいが濃密で家族の規模も大きい沖縄で育った学生にとって、親戚が周囲にいないというのは考えられないことなのである。このことから、移民ということがもたらすことの一端を学生たちは身近に感じたようである。

第3点も、とくに県内出身学生にとって興味深かったようである。これは、沖縄よりも移住先のほうに愛着を感じていることを素直に残念に思っているということもある。それに加え、一般に移民といえば苦労の連続であると思われており、実際に番組の冒頭でも具体的にボリビア移民の苦難の歴史が語られているのに、それでも移住した土地を故郷と思えるということが新鮮だったようである。

そのほかに興味深かったコメントとして、親戚の集まった席で安里さん夫婦が披露したカチャーシーが見事だったという感想があった。カチャーシーとは宴会の席での踊りであり、コメントを寄せた女子学生によると、その独特の手の動きは今の若い人にはうまくできないのだという。そこで彼女は、ボリビアという沖縄から遠く離れた土地でも、結婚式など沖縄からの移民が集まる際に、みんなでカチャーシーを踊ってきたのだろうと想像する。これは本土出身者には気づきにくい点であり、筆者には参考になった。

総じて言えば、このドキュメンタリー映像は、歴史的なものではなく、現在進行形であるということもあって、移民という現象を身近に感じさせ、学生に具体的なイメージを与える役割を果たしたといえる。少なくとも、沖縄で学ぶ学生には非常に効果的であった。

IV. 自己評価—むすびにかえて—

最後に、全体を通じて改善すべき点を述べておきたい。

まず、成績をつけるための課題についてであるが、身近な移民経験者への聞き取り調査については、学生自身が楽しんで取り組んでおり、今後も継続していきたいと考えている。学生にとっても、身近な人から経験談を聞き取ることにより、多くの場合には学生の想像

を超える，そのダイナミックな一生なり半生なりを具体的に知ることができるのだから，主体的に取り組めるし，おもしろいと思われる。ある学生はレポートの最後に，身近な親戚に過去のことについていろいろ聞いてみたいということはあっても，なかなかきっかけがつかめなかったところ，移民という切り口で具体的に話を聞くことができ，非常によかったという感想を述べている。また，2006年度前期には，本人がアルゼンチンで二世として生まれ，小学生時代に沖縄に戻ってきたという学生が受講していた。彼女はこのレポートを，これまで聞きにくかった移住や帰国の経緯を父親に聞くきっかけにできたという。こうしたレポートは，筆者も読んでいておもしろいし，非常に参考になる。そして，将来的にはこうした学生のなかから卒論で移民研究に取り組む者が現れてくれればと，ひそかに願っている。

しかし，移民経験者への聞き取りができるのは，2006年度の実績からすると受講学生の1割程度である。残りの学生は読書レポートをすることになるが，現状では書物も学生の主体的な選択に任せており，玉石混交に近い状態になっている。幸い沖縄では地域史の刊行がさかんであり，そのなかに移民編を設けている市町村も多いので¹¹⁾，生の体験談を聞き取るのに近い状況をつくるための解決策としてそれらを活用することを考えているが，まだ具体的な策を思いつく段階には至っていない。

講義内容についても改善すべき点は多い。まず，本科目は共通教育科目であり，学部に関係なく，しかも比較的低学年の学生が受講する科目である。それにしても，石川(1997)，矢ヶ崎(1993)，竹沢(1994)，山田(2000)など，学位論文をベースにして書かれた専門書に依拠する形で講義を構成しているため，内容がやや高度かもしれないと感じている。標準的なテキストがない以上，自らの研究と従来の研究成果に基づいた構成をするしかないが，少しペースダウンして易しめの内容にすることを検討すべきかもしれない。

また，共通教育科目を管轄する大学教育センターの指示により義務的に行っている授業アンケートの結果によれば，琉大特色科目なのだから沖縄の話をもう少ししてほしいという不満がいくつもあった。これは，筆者がこれまで北アメリカをフィールドとした研究に取り組んできたためもあって，沖縄はもとより，沖縄と縁の深いハワイやラテンアメリカについての勉強不足によるところが大きい。Ⅲで述べたドキュメンタリー視聴がそうした不満を多少は和らげる効果はあったようだが，今後はこうした希望も取り入れた講義構成にしたいと考えている。

しかし，一方では沖縄や日本人移民だけでなく，世界規模で移民についての話を聞いてみたいという動機で受講する学生もいる。琉球大学では現在，シラバスは紙媒体では配布されずにインターネット上のみであり，シラバスをしっかりと参照して受講を決めるのではなく，講義名のみを授業科目配当表で選んで受講を決める学生がほとんどなので，こういうことが起こりうる。シラバス参照が徹底されれば解消する問題でもあるが，日本人移民

以外の移民の話に関心を持つのは悪いことではないので、こうしたニーズにも応えたいという気持ちもある。

なお、Ⅲで述べたドキュメンタリー視聴は筆者の講義には非常に効果的であったが¹²⁾、映像資料の収集は容易ではなく、放送局の協力が得られればベストであろう。これについては日本移民学会などが組織的に情報の蓄積を進めていくことを期待したい。

以上、筆者が2006年度に琉球大学で担当した「移民論」の授業実践について提示した。読者諸氏のご批判をいただければ幸いである。そして、将来的には日本人移民に関する標準的なテキストの作成につながっていくことを願っている。

注

- 1) 筆者は都合により参加できなかったが、日本移民学会が「移民研究の教育の現場から」と題したワークショップを2006年8月6日に津田塾大学で開催している。
- 2) 筆者のこれまでの研究はカナダの言語集団に関するものが中心であり(たとえば、Oishi 2001; 大石 2006)、日本人移民について自らの研究の蓄積があるわけではないということもある。
- 3) 本稿において受講学生とは、受講登録をした学生ではなく、欠席が5回未満で期末試験を受けることのできた学生を指す。
- 4) 沖縄では地元のメディアに移民の話題が登場することも多く、移民を扱ったテレビ番組を見たことを受講の動機とする学生もいる。一方で、これまでまったく関心がなかったという県内出身学生も少なくない。
- 5) 2006年度現在、琉球大学には法文、教育、理、医、工、農の6学部がある。しかし、本稿では煩雑さを避けるために理系学部については詳細を示さないことにした。なぜなら、一般に理系学部の学生は興味・関心よりも都合のよい時間帯に開講される講義を受講する傾向が強いからである。ただし、理系学部の学生にも移民に強い関心を抱いて受講する学生がまったくいないわけではない。
- 6) 2006年度の入学定員は、総合社会システム学科が昼間主と夜間主をあわせて265名、観光科学科が昼間主のみ40名、人間科学科が昼間主のみ95名、国際言語文化学科が昼間主と夜間主をあわせて110名である。筆者の講義は昼間主向けではあるが、夜間主の学生も受講でき、実際に夜間主の学生も少なくなかった。なお、2006年度前期には観光科学科の受講学生はいなかった。
- 7) レポートを課すにあたり、筆者は推薦図書だけでなく、その他の書籍についても若干の紹介を行っているが、実際の選択は学生に任せている。その結果、選ばれる書籍には新書や文庫も含まれ、著者も研究者だけではなく、ジャーナリストなど多彩であり、難

解な専門書を選択した学生には結果的に不公平になっているかもしれない。しかし、本科目は理系学部からの受講生も存在する共通教育の科目であり、この点は問わないことにせざるを得ないだろう。

- 8) 巡検とはいささか大げさな言葉であるが、1名ないし数名の案内者のもとに現地を実際に訪ねることを日本の地理学では巡検とよんでいる。英語ではエクスカージョンないしフィールド・トリップとよばれることが多い。時間の長短は問わず、講義の一環として1コマの時間内にキャンパスの周辺を歩くものから、宿泊を伴うものまでさまざまである。
- 9) このドキュメンタリーのビデオが琉球大学移民研究センターに所蔵されているのは、取材を受けた石川友紀・琉球大学名誉教授（同センターの初代センター長）が製作者から寄贈を受けているからである。ただし、取材された場面は放映されていない。
- 10) その過程で、元ボリビア移民で現在は帰国して横浜市鶴見区で会社を営む長年の友人を夫が訪ねるという場面がある。鶴見というのは象徴的であるが、鶴見が戦前から沖縄県出身者が多い土地であることは、現在の沖縄の学生にはほとんど知られていない。
- 11) 最近刊行されたものに、南風原町史編集委員会（2006）や北谷町史編集委員会（2006）がある。
- 12) ただし、ここで紹介したのは沖縄からの移民を扱ったものであり、沖縄以外の学生にどの程度の興味を喚起するのかは分からない。

文 献

- 飯野正子 2000. 『もう一つの日米関係史—紛争と協調のなかの日系アメリカ人—』有斐閣.
- 石川友紀 1997. 『日本移民の地理学的研究—沖縄・広島・山口—』榕樹書林.
- 大石太郎 2006. カナダの英語圏都市におけるフランス語系住民の言語維持とフランス語系コミュニティの発展—ノヴァスコシア州ハリファクスの事例—. 地学雑誌 115: 431-447.
- 竹沢泰子 1994. 『日系アメリカ人のエスニシティ—強制収容と補償運動による変遷—』東京大学出版会.
- 北谷町史編集委員会編 2006. 『北谷町史 附巻 移民・出稼ぎ編』北谷町教育委員会.
- 南風原町史編集委員会編 2006. 『ふるさと離れて 南風原町史 第8巻 移民・出稼ぎ編』沖縄県南風原町.
- 矢ヶ崎典隆 1993. 『移民農業—カリフォルニアの日本人移民社会—』古今書院.
- 山田千香子 2000. 『カナダ日系社会の文化変容—「海を渡った日本の村」三世代の変遷—』御茶の水書房.

- Louder, D. R., and Waddell, E. eds. 1992. *French America: Mobility, Identity, and Minority Experience across the Continent*. Baton Rouge: Louisiana State University Press. Louder, D. R., and Waddell, E. eds. 1983. *Du continent perdu à l'archipel retourné: Le Québec et l'Amérique française*. Québec City: Presses de l'Université Laval.
- Oishi, T. 2001. Ethnic persistence of the Acadians and its regional characteristics in New Brunswick, Canada. *Geographical Review of Japan* 74B: 117-131.

(おおいし たろう・琉球大学移民研究センター講師・人文地理学)